ハイデッガーに於ける「現存在」と「言語」の關係について

野口榮子

一

ハイデッガーは彼の哲學に於いて「人間存在」を示す意味で「現存在」(Dasein)といふ術語を使用して居る。

一九二七年に出版された初期の主著「存在と時間」(Sein und Zeit)から最近の「ヒューマニズムについて」(Über den Humanismus 一九四六年執筆、四七年出版)に至るハイデッガーの哲學的な問題過程の中では現存在に對して種々の規定が行はれて來た。それらの規定の中で特に現存在を「言語」(Sprache)との關係に於いて考察することが可能である。

先づ「存在と時間」に於いては、現存在と言語の關係は「語ること」(Rede)によつて說明されて居る。「語ること」は現存在を根據付けて居るところの「世界內存在」(In-der-Welt-sein)の性格である「了解性」(Verständlichkeit)の具體的な「分節」(Artikulation)であり、同時に「言語」の實存論的な(existential)地盤である。

この現存在はその後「世界內存在」としての「了解性」が內包して居る了解的側面(「根據の本質について」(Vom Wesen des Grundes)一九二九年出版)と情態性(Befindlichkeit)の側面(「形而上學とは何か?」(Was ist Metaphysik?)一九二九年出版)を各々强調されて、「ヘルダーリンと詩の本質」(Hölderlin und das Wesen der Dichtung 一九三五年出版)に於いては、「原言語」(Ursprache)である「詩(Dichtung)を語る」「詩人的」(dichterisch)な現存在へと展開して居る。その際現存在と言語の關係は「存在の建立」(Stiftung des Seins)である。而して「人間存在の最高の可能性を意のままにする」(Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung S. 35)のが言語であり、「詩人が本質的な言葉を語る」(op.cit.S. 38)と規定されるに至つて居るのである。

卽ちハイデッガー哲學に於ける現存在と言語の關係は「了解性の分節」としての「語ること」から「存在の建立」である「詩を語ること」へと展開して居る。而してこの展開の道程を尋ね、各々の規定に意味を與へることがハイデッガー哲學に於ける現存在と言語の關係を問題にする際

に可能な方向だと思はれる。

而してこのやうな現存在と言語の問題の展開は、ハイデッガーの思想全體に照して考へた場合に、所謂ハイデッガーの語つて居る彼の思想の「轉換」(Kehre, Über den Humanismus S. 17參照)——卽ち「存在と時間」(Sein und Zeit)から「時間と存在」(Zeit und Sein)へ、及び「實存」(Existenz)から「外存」(Ek-sistenz)へ、「現存在の努力して得たもの」(Verdienst des Daseins)から「存在の贈物」(Geschenk des Seins)への過程等と對應して居り、ハイデッガー哲學の一面を示すものである。

最近のハイデッガーは「存在と時間」よりも「時間と存在」に、「實存」よりも「外存」に、「現存在の努力して得たもの」よりも「存在の贈物」に、「形而上學」よりも「詩」や彼の新しく考へた「思惟」(Denken)に於いて彼の哲學の本質及び彼の意味する「眞理」(Wahrheit)を證明しようとして居る。而もそのやうな「轉換」はハイデッガーの語を借りれば、「眞理の本質について」(Vom Wesen der Wahrheit 一九四三年出版)の內容が始めて考へられた一九三〇年を中心に始つて、(Über den Humanismus S. 17參照)「藝術作品の根源」(Der Ursprung des Kunstwerkes 一九三五年から六年への講演、後に「森の徑」(Holzwege 一九五〇年)に收錄)及び「ヘルダーリンと詩の本質」に至るまでに一應完成して居るのである。

從つてここでは「存在と時間」から「ヘルダーリンと詩の本質」に至る彼の諸著作に問題を限定して、ハイデッガーの思想大系の展開と呼應し乍ら、現存在と言語の關係を探究してみたいと思ふ。

それにより單にハイデッガーの問題に止まらず、一般に現存在と言語の關係が問題にされる際の「了解性の分節」としての「語ること一般」と「詩を語ること」の意味、及びその關係の內包する「藝術性」の問題の存在論的な一端を明瞭にすることが出來ると思ふ。

二

ハイデッガーは「存在と時間」の中で現存在をギリシヤの存在論の定義に基づき、「ゾーン・ロゴン・エコン」(ζῶον λόγον ἔχον)として規定して居る。このギリシヤ語はラテン語に飜譯される時に、「animal rationale」—「ロゴスー理性を持つた動物」卽ち「人間」といふ意味に解された。しかしハイデッガーは「ロゴス」を「理性」と飜譯する立場を採らない。彼は「ゾーン・ロゴン・エコン」に對し、同じ「人間」でも「その存在が本質的に、語ることが出來ること(das Redenkönnen)によつて規定されて居るところの生き物」(Sein und Zeit S. 25)といふ說明を與へて居る。卽ちハイデッガーは「ロゴス」といふ語に「理性」より以前に「語ること」といふ意味を强調したのである。

彼によれば人間は先づ環境的な「世界」の中に「存在物」(das Seiende)として存在して居るところの机や椅子や犬と同じく「存在物」である。しかしそれ丈では人間の單なる素朴な規定にすぎない。ハイデッガーは人間の現存在を人間以外の存在物と區別することから彼の哲學を始めて居る。而も彼はその區別の規準を外ならぬこの「ゾーン・ロゴン・エコン」といふ規定に求めて、人間を他の存在物より優位に置き、「現存在」といふ名稱を與へた。

「存在と時間」の規定によれば、人間は哲學的な反省の有無に拘らず「實存して」(existieren)居る。「現存在の〝本質〟はその實存(Existenz)に存する。」(op. cit. S. 42) と言はれて居るが、それは全く、「存在的な〝出來事〟」でさへある。現存在は「我在り」(ich bin)「汝在り」(du bist) といふ人稱代名詞を伴ふ「常自己性 (Jemeinigkeit) によつて制約され」た「本來性と非本來性といふ二つの樣相に於いてその何れかの中でか乃至は兩者の變樣の無差別 (modale Indifferenz) の中で實存して」居る。(op. cit. S. 42～53) 從つて實存といふ術語は現存在に對して積極的な意味にも消極的な意味にも使用されて居る。「實存」は一般に考へられて居るやうに、「人間的自覺存在」といふ意味丈を持つて居るのではなく、いはば「現存在のあり方そのもの」を示して居るのである。

しかもハイデッガーは「存在と時間」ではこのやうな人間の本質規定としての現存在の實存の出來事を、單に實存的(existentiel)にではなく、その實存性 (Existentialität) を採り出す爲に、實存的とは區別された、實存論的 (existential) といふ仕方で「整理し」「理論付け」た。いはば解釋の立場から意味付けたのである。

「存在と時間」に於けるハイデッガーの學としての分析の方法は、フッサールの現象學に負ふところが多い。しかし、ハイデッガーの現象學は、クラフトが、「ハイデッガーは哲學的綜合現象としてフッサールに甚しく對立して居るが、それにも拘らず、現象學的學說の發展の經過を曲解することなく繼續的に整理した。—(中略)—それは敎壇哲學の一部門といふよりは——〝現存在それ自身の中の、現存在それ自身としての根本生起〟である。」(Julius Kraft: Von Husserl zu Heidegger S. 94) と言つて居る如く、フッサールの立場を繼承しつつハイデッガー獨自のものである。「現象」(「それ自身に於いて自己を示すこと」(das Sich-an-ihm-selbst-zeigende) 「開示可能なもの」(das Offenbare)) を「ロゴス」を通じて「見せる」(Sehen lassen) 「自己を示す」(Sichzeigende) ことが「ハイデッガーの現象學」なのである。而してこの方法が所謂「現存在の實存論的分析學」(existentiale Analytik des Daseins) の根據になつて居る。「存在と時間」の凡ゆる試みは現存在に對するこのやうな實存論的分析學の努力に外ならないと言へるであらう。

而も「存在と時間」では「實存」としての現存在のこのやうな規定は更に「世界內存在」(In-der-Welt-sein) といふ一層根源的な「存在機構」(Seinsverfassung) から理解される必要がある。

現存在は「世界內存在」といふアプリオリな空間性 (Räumlichkeit) によつて構成されて居る。

ハイデッガーは一應世界を環境的な「世界」といふ意味と存在物の領域的な名稱——數學者の「世界」といふ如き「共通な世界」といふ意味に分けて考へて居るが、「世界內存在」と言はれる際の世界は、世界のこの兩樣の意味に於いて使用され、而も現存在の性格を形成して居る「根據」(Grund) として考へられて居る。

世界と現存在の關係は各々「…に於いてあることそれ自身」(In-Sein als solches) への「方向付け」(Orientierung) といふ性格に於いて成立して居る。卽ち世界は現存在の「根據」であり、現存在は世界を根據にすることによつて現存在としての意味を獲得して居る。いはば現存在が世

界に對して「…のもとに住む」(wohnen bei…)といふ性格――「依據性」(Angewiesenheit)を持つて居る故に現存在が世界内存在であることが可能なのである。世界は「…現存在が存在物としてその都度既にその中に於てあつた〃ところの〃(worin)何ものかであり、そこへ現存在が凡ての何らかの明瞭な到達に於て全く還歸昌來るところの(worauf)何ものか」である。(S. u. Z. S. 76)

從つて「世界内存在」が現存在の空間性であると言つても「世界内存在」の「世界」は單に環境的な意味での空間的延長を意味するに止まるものではない。單なる「内部性」(Inwendigkeit)から明瞭に區別されたところの「空間性」をハイデッガーは現存在に對する「世界内存在」に於いて意味して居るのである。

而して「世界内存在」としての現存在の「〃現〃であるといふこと」(das "Da" zu sein)は「存在と時間」によれば現存在の開示性(Erschlossenheit)である。而してこの「〃現〃」の構成樣式は、等根源的に(gleichursprünglich)「了解」(Verstehen)・「情態性」(Befindlichkeit)・「語ること」(Rede)といふ三樣の說明を通じて行はれて居る。「了解」は現存在の持つ解釋的側面を代表させた術語であり、「情態性」は氣分(Stimmung)の側面を示す術語である。而も現存在に於ける「了解」の實存論的な構造は「投企」(Entwurf)といふ態度に於いて開示され、「情態性」は「被投性」(Geworfenheit)といふ狀態に於いて開示されて居る。「投企」と「被投性」は世界に對して全く反對の關係にある。「投企」は現存在が世界に對して何らかの態度をとるといふ意志的な投げかけを意味するのに對し、「被投性」は引き渡されてあることの事實性(Faktizität der Überantwortung)を意味して居る。「被投性」はいはば現存在の意志とは無關係な、世界に於ける現存在の「狀態」を示す術語である。從つて現存在の存在構造である「現存在があること」(Daß es (Dasein) ist)が現存在の被投性だとも言へるわけである。即ち「被投性」――「情態性」を現存在の存在それ自身の在り方―狀態として意味付けることも可能なのである。しかし「存在と時間」に於いては情態性のこの側面―現存在の存在の根據としての意味は主題的でなく、「了解性」(Verständlichkeit)の問題が中心になつて居る。

而して「語ること」は現存在に對して「情態性と了解と共に實存論的に等根源的で」(op. cit. S. 161)あり乍ら、「語ること」は「了解性の分節(Artikulation)である。」(op. cit. S. 161)「情態性と了解は等根源的に語ることによつて(durch)規定されて(sind bestimmt)ゐる。」(op. cit. S. 133)と考へられて居るのである。

この說明により、「了解」・「情態性」・「語ること」のより根源に更に「了解性一般」といふ概念を措定することが出來る。而してこの了解性は世界内存在そのものの性格を意味すると考へることが出來る。いはば了解性は「存在と時間」に於ける現存在の根源的な性格である。了解性といふ根本性格に於いて現存在は世界内存在であり、了解性を根據とすることで現存在は世界の中で他の現存在と出會ひつつ(begegnend)存在することが可能なのである。現存在は「話しかけること(Ansprechen)と話しかけられること(Besprechen)の中で出會ふ存在物」である(op. cit. S. 25)と言はれて居る如く、了解性の分節としての語ることの相互關係の中で成立する存在である。

從つて人間が語ることを根據にして居る、卽ち「ゾーン・ロゴン・エコン」だといふ規定は、かかる了解性との關係に於いてはじめて可能だと言へる。「ゾーン・ロゴン・エコン」は人間の存在全體を支へる基盤——換言すれば人間の存在可能性それ自身が語ることに於いて根據付けられて居るといふことを意味して居る。ハイデッガーに於ける「語ること」は、ただ「聲を出すこと」といふやうなことを指すのではなく、いはば人間存在の根據にアプリオリに屬して居る根源的な表出能力だと考へられて居るわけである。

ハイデッガー自身「語ること」の意味を「自己の心中を打開けること」(Sichaussprechen)だと說明して居る。「自己の心中を打開けること」はハイデッガーに於いては、「我在り」、「汝在り」といふ個々の現存在が各々に自己開示を行ひ自己を語つて居るといふことである。而もその各人は自己を語る事に於いて、相互に了解し合ひ乍ら「世界」といふ共通の場を持つて居るのである。

「語ること」が現存在と現存在の出會ひを意味するのであれば「用視」(Umsicht)が現存在と存在物の出合ひを意味する術語だと言へる。その際「語ることが外へ發言されたこと」(Hinausgesprochenheit)が「言語」であり、「語ること」は「言語」の實存論的な地盤である。しかし乍ら「語ること」はハイデッガーによれば、單に「聲を出すこと」に止まらず、根源的な意味での個々の人間存在の全體的な開示作用であるから、「身振りの樣式」(Aktionsarten)として發言されてもよい。(op. cit. S. 349) その場合は「語ること」が「身振りの樣式」の實存論的な地盤になつて居るのである。

しかしハイデッガーは「存在と時間」では「語ること」は「…實際多くの場合、言語に於いて發言され」る (op. cit. S. 349) と言つて居る。「言語」には現存在の時間性に根ざした實存論的な時間性が存するが、「身振りの樣式」にはそれが見られないから、「身振りの樣式」は現存在に對して「言語」よりも二次的だといふのが彼の意見である。

ここに於いて「存在と時間」でハイデッガーが意味する「言語」は了解性と關連した「記號」(Zeichen) といふ意味が强いことが了解される。

現存在は世界の中で「物在」(Vorhandensein) であるところの存在物を「用視」(Umsicht) といふ仕方で見ることによつて、存在物の「用在」(Zuhandensein) 卽ち「道具」(Zeug) としての性格を成立せしめて居る。

「記號」はハイデッガーによれば最初「道具」として成立して居る。「道具」は現存在が「對物的關心」(Besorgen) (現存在の存在樣式であり、不安 (Angst) の存在學的基礎である「關心」(Sorge) が「對人的關心」(Fürsorge) と共に內包する一樣相) を地盤とする「用視」を通じて、客體であるところの存在物を自己に有用な「用在」とした時の具體的な名稱である。單に客觀的な對象としての存在物は、現存在の指示 (Verweisung)=關係 (Beziehung) によつて道具としての性格を與へられて居るのである。道具となることに於いて現存在と存在物が出會つて居る。而もハイデッガーによれば、「道具」は「記號」(Zeichen) によつて根據付けられ、道具の性格は「表示すること」(Zeigen) によつて成立して居る。現存在と存在物は單に別々な主體と客體に止まらず、道具性

に於いて、現存在の「用」と存在物の固有の性格が生かされて居るといふ結果になつて居るのである。即ち個人の「用視」を通じて獲得された「道具」が普遍性を持つて居るのは、道具が荷つて居る記號性の故なのである。「存在と時間」に於けるハイデッガーの現存在と言語は「語ること」を通じて、この道具性が象徴するところの關係と同じ關係を附與されて居る。現存在の自己開示が言語といふ記號を通じて、最も有效に表示されるといふことをハイデッガーは考へて居たのである。

而もハイデッガーは「語ること」に於いて具體的には「話すこと」(Sprechen)と「聞くこと」(Hören)「沈默すること」(Schweigen)が屬して居ると言ふ。(op. cit. S. 161)「語ること」が言語として發言されること(Aussprechen)が即ち「話すこと」(Sprechen)といふ人間の行爲である。「語ること」は「話され」なければ「語ること」の屬して居る了解性を具體的に表示することは出事ない。而して「話すこと」が「話されること」——即ち「聞くこと」を予想し、同時に「話さないこと」——「沈默すること」をも内包して居るのである。それ故に人間は「話しかけることと話しかけられることの中で出會ふ存在物」だと言はれたのである。

ハイデッガーは人間が話す時、「言語の上での」「音の抑揚・變調・語ることのテンポ、〃話し振りの中に〃」(op. cit. S. 162)個人的な相異や感情の曲折が認められると言つて居る。確に「話すこと」の「話し振り」の中にのみ、「語ること」の意味は讀みとられることが出來るであらう。しかし言語が「話され」る以前、いはば言語の實存論的な地盤である「語ること」が行はれる時同時に、單なる「話し振り」の相異とは異つた現存在の根源的な自己開示が成立するといふことがより重要である。實際に言語を話す時の「話し振り」にではなく、「語ること」それ自體に於いて現存在の個性が成立して居る。而もその「語ること」は「話すこと」に於いて具體的に表はされる外ないのであるから、ハイデッガーの言に忠實であれば、「話すこと」が同時に「語ること」だといふことにもなるであらう。

之に加へて、現存在が語るといふこと、即ち現存在がある一定の言語を指示するといふことによつて、言語自體の性格も生かされて居るといふことを考へることが出來る。「存在と時間」では言語の道具性——記號性が語られ乍ら、言語自體の意味は未だ明瞭でない。

言語が記號となる時、現存在にのみ自己開示が行はれるのではなく、言語自身も自己開示を行つて一つの意味性の中に定着されるといふことを「存在と時間」に於けるハイデッガーの現存在と言語の問題に於いて考へることが出來る。

ハイデッガーは言語自體の意味に關しては、後の「ヘルダーリンと詩の本質」で採り上げ、言語の詩的性格に注目して居る。

しかし乍ら「存在と時間」に於ける記號としての言語と雖も、既に現存在の指示作用が行はれて居る限り、そこに於いては個々の現存在の個人的な「語り方」の相異が認められるわけであるから、「話された言語」が現存在を離れて、一つの價値を持つといふことは言へる。了解性一般の分節としての「語ること」を地盤とする言語が、現存在の開示作用の道具として、現存在によつて「話され」る時、單に普遍的な符牒に止まらず、言語自體が現存在と結合した新な意味を表示して居るといふこと

が考へられるのである。而もその「話す」ことは言語の持つ時間性と普遍的な記號性、いはば言語の持つ概念性の故に、「身振りの樣式」などよりも、他人に對する傳達力が強いのである。

言語に對し、「色」や「音」等も又記號を表はす媒材となることがある。街の四つ角に取付けられた赤や綠は、ゴー・ストップを表示する記號であり、一定のサイレンが正午を知らせたり、火災を報知することは一般に行はれて居る。

サルトルが「文學とは何か?」(J-P. Sartre: Situations II. Qu'est ce que la littérature?)の中で注目して居る如く、この世の中には「純粹な色や音といふものはあり得」ず、必ず何らかの形を持つ色や、何らかの連續に於いて示される音がある丈である。だから人は「花言葉で話す」ことをも、しばしば行つて居るのであるとサルトルは言つて居る。しかし色や音にはそれ自體として概念性が少い。繪畫に於ける赤や綠、又テーブル掛けの赤や綠は全くゴー・ストップの意味から離れて居る。サイレンも用ひ方ではいろいろの意味を附與される。

それに對し、言語の「ゴー」は「行く」といふ意味を、「ストップ」は「止る」といふ意味を、何時如何なる場合に使用されても常に內藏して居る。いはば言語には根源的な普遍性がアプリオリに屬して居るのである。

この意味でサルトルは「言語」を「記號」(signe)とし、「色」や「音」を「物」(chose)と分類して居るのである。而もサルトルに於いては「言語」の中でも「詩」の言語が「物」であり「記號」としての言語は散文に屬するのであるが、記號としての言語も物としての言語も共に創造性によつて「藝術的な言語」といふ意味を附與されて居るのである。

ハイデッガーに於ける現存在の根據としての言語も單なる符牒に止まらず、現存在の自己開示に於て構成される時、それ自體「藝術的な言語」として成立する可能性を有して居ると言へるであらう。

三

「存在と時間」に續く「根據の本質について」では「存在と時間」で使用された術語の「投企」(Entwurf)といふ意味の現存在と「世界」の關係が「超越」(Transzendenz)と「根據」(Grund)といふ地盤から解明されて居る。即ち「根據」とは根據の本質が取扱はるべきその場面に於いて、「超越」が始めてより根源的包括的に規定される如き意味を持つて居る。「世界が世界する」(Welt weltet)といふことによつて「世界」の根柢にある「自由」(Freiheit)が明瞭になり、人間的現存在の本質に「世界內存在」が屬しつつ、而も現存在の超越が可能になるといふ說明が「根據の本質について」の中で行はれて居るのである。

これに對し、「形而上學とは何か?」の中では、「存在と時間」に於いて結局了解性との密接な關係に於いてしか語られなかつた「被投性」といふ現存在の氣分的情態的側面が「了解性」から獨立した積極的な性格を附與されて、「無」(Nichts)との關係から問題にされて居る。「形而上學とは何か?」に於いて、ハイデッガーは科學が放棄した「無」の問題を採り上げてそれと對決しようとした。ハイデッガーによれば、「無」は、悟性によつてではなく、現存在の「無」に對する「根本經驗」によつてのみ明らかになる。ハイデッガーはこの根本經驗に對して特に「存

在と時間」時代からの「情態性」(Befindlichkeit)といふ語を使用して居るが、「形而上學とは何か？」では、その「情態性」によつて「全體に於ける存在物」(Seiendes im Ganzen)を明らかにすることが出來ると考へた。(Was ist Metaphysik? S. 28)「全體に於ける存在物」が卽ち「無」であり、後に彼が「ヒューマニズムについて」等で意味する「存在」(Sein)である。ここで「情態性」が「存在と時間」時代には見られなかつた積極的な意味を與へられ、現存在の「被投性」が獨立するに至つて居る。しかし「情態性」は單に「情態性」として丈では未だ「無」を完全に明らかにすることは出來ない。「情態性」は「不安」(Angst)の根本氣分として規定される時始めて「無」を解明するところの「現存在の根本生起」(Grundgeschehen des Daseins)となるのである。

「不安」はハイデッガーによれば「恐怖」(Furcht)とは異つて居る。「恐怖」は「このもの」「かのもの」に對する「恐怖」であるが、「不安」は常に「このもの」「かのもの」に對する「不安」ではなく、何となく氣味がわるい(es ist einem unheimlich)といふ在り方で全體として我々にやつて來るところの氣分である。而してこの時、「全體に於ける存在物」の「遠ざかり」(Wegrücken)が存在物の「滑り落ち」(Entgleiten)として我々の上に殘るのである。「我々は不安の中に〃浮動して〃居る。より明瞭に言へば不安は我々を浮動させる。」(op. cit. S. 29)而して「純粹な現-存在(Da-sein)のみが、この浮動の動搖に於いて、その浮動の中で、何ものにもすがりどころがないものとして、なほそこに(da)あるのである。」(op. cit. S. 30)と述べられて居る。

「不安」といふあり方に焦點を絞つて考へられた「情態性」によつて「無」と對面させられた現存在は、「純粹な現-存在」として、そこにあるのである。

而してその時現存在は「存在と時間」時代の了解性の分節としての「語ること」から全く絶緣されて居る。「不安は我々に言語を封じて了ふ。全體に於ける存在物が滑り落ち、かくして正に無が迫り來る故に、それに向ふとその凡ゆる〃である〃-と言ふこと("Ist"-Sagen)が沈默する」(op. cit. S. 30)といふ狀態が生ずるのである。「〃である〃-と言ふこと」、卽ち了解性の分節としての「語ること」がここに於いて全く沈默して了ふのである。

「存在と時間」でハイデッガーは情態性に於ける言語が强調される時、「〃詩的な〃語ることの固有の目標となることが出來る。」(S. u. Z. S. 162)と述べて居るが、ハイデッガーが旣に現存在の氣分的側面である情態性を强調することによつて、現存在の「詩的な」性格が意味付けられると考へて居たことが了解出來る。「純粹な現-存在」の成立と、「〃である〃-と言ふこと」の沈默によつて、「形而上學とは何か？」以後は「了解性」——「世界內存在」としての現存在とは別の現存在の性格が規定されるやうになるのである。

これに關して恰も「形而上學とは何か？」と對應する如く、「ヘルダーリンと詩の本質」では、「言語はある自由に使用され得べき道具(ein verfügbares Werkzeug)ではなくて、人間存在(Menschsein)の最高の可能性を意のままにするところの出來事である。」(Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung S. 35)「人間の現存在の根據は言語の固有の生起(Geschehen)としての對話(Gespräche)である。しかも原言語(Urspra-

che) は存在の建立(Stiftung des Seins)としての詩である。」(op. cit. S. 40) と言ふ規定が語られるに至つて居る。

「存在と時間」に於ける了解性の分節としての「語ること」によつて基礎付けられて居るところの「言語」は、ここで改めて、人間存在の根據として性格付けられた。而もその「言語」の一層根源である「原言語」は「詩」であり「詩」と關係するところの人間の現存在が「詩人的な現存在」として考へられて居る。即ち「詩人が本質的な言葉を語る」(op. cit. S. 33) のであり、「我々の現存在は根據に於いて詩人的」(op. cit. S. 39.40) である。つまり現存在の根據が詩の言語によつて意味付けられて居るといふこと、現存在が詩人的だといふことが規定されたのである。

「ヘルダーリンと詩の本質」の中で人間の現存在がこのやうに詩人的な性格を持つて居るといふことが語られ、了解性の分節としての「語ること」は新に「詩を語ること」といふ意味を獲得した。「存在と時間」時代に於ける了解性の分節としての「語ること」といふ言語の意味は、ここで詩人の言語といふ方向に轉換して居ると考へられるのである。

ハイデッガーのヘルダーリンに對する注目は、ヘルダーリンが「詩人の詩人」であり、「詩の本質を特に詩作して居る」(op. cit. S. 32) からなのであるが、ヘルダーリンは單なる手がかりであり、ヘルダーリンを通じて、ハイデッガーは自己の哲學の問題を語つて居ると言つてよい。

現存在並びに言語に對する規定のこの展開も「存在と時間」から「ヘルダーリンと詩の本質」に至るハイデッガーの思想の轉換の一面を形成して居るものである。

現存在はハイデッガーの別の規定から言へば、「實存」(Existenz) から「外存」(Ek-sistenz) へ轉換して居るのであり、それに伴つて現存在の屬して居る「世界」(Welt) も「ヘルダーリンと詩の本質」に於いては「大地」(Erde) といふ方向へ轉換して居るのである。

彼の立場は順序を追つて檢討すれば必ずしも「轉換」(Kehre) ではなく發展であり、當然の歸結だと言へる。レヴイットが問題にして居る如き (Karl Löwith; Heidegger Denker in dürftiger Zeit)「逆轉」といふ意味での「轉換」ではなく寧ろ「展開」であり「發展」である。しかし「實存」の側にある「現存在」や「世界」や「言語」を、同じ「實存」の立場に立つてではなく、全く逆の「詩」や「思惟」(Denken) の立場から考へられる「外存」へと視點を向け換へて見るといふのが彼のその後の立場なのであるから、やはり彼自身にとつては重大な立場の「轉換」であつたとも言へるわけである。しかし乍ら「ヒューマニズムについて」の中で彼が自己の立場の「轉換」といふ事を語る時に「存在と時間」に於ける立場を修正して「存在と時間」に於ける「實存」も實は「外存」の意味に解さるべきだと言つて居る (Über den Humanismus S. 18.f) ことから考へれば、現存在の「實存」から「外存」への過程を當然、發展的經過として考察することも可能になるわけである。「存在と時間」以來「根據の本質について」「形而上學とは何か?」「ヘルダーリンと詩の本質」と次々に出版されたハイデッガーの著作の中で、「形而上學とは何か?」と「ヘルダーリンと詩の本質」の間に「眞理の本質について」(Vom Wesen der Wahrheit) と「藝術作品の根源」(Der Ursprung des Kunstwerkes) を考へることが出來る。「眞理の本質について」は出

版されたのは一九四三年であるが、一九三〇年頃から種々な形で講演などがなされて居り、ハイデッガー自身もその内容が考へに上つたのは一九三〇年頃からだと述べて居る。即ち「ヒューマニズムについて」の中で彼は「一九三〇年に考へられ而して講演されたが一九四三年に初版を印刷されたところの〝眞理の本質について〟の講演は〝存在と時間〟から〝時間と存在〟への轉換の思惟への或る確實な視點を與へて居る。この轉換は、〝存在と時間〟の立場の一つの變化（Änderung）ではなくて、その轉換の中ではそこに於いて〝存在と時間〟が經驗されしかも存在忘却（Seinsvergessenheit）の根本經驗から經驗するところの次元の場所に先づ探究される思惟が到達する。」（Über den Humanismus S. 17）と語つて居るのである。

從つて「存在と時間」「根據の本質について」「形而上學とは何か？」「眞理の本質について」「藝術作品の根源」「ヘルダーリンと詩の本質」といふ順序で、ハイデッガーの思想が漸次「轉換」した跡付けを辿ることが出來ると思ふ。

「眞理の本質について」では「覆はれたものが顯はになること」が眞理であると考へられた。ギリシヤ語の「眞理」（ἀλήθεια）の持つ「覆ひを取除くこと」といふ意味がハイデッガーの語る「眞理」である。而してその「顯はになること」が現實になつた場合に、「現存在」といふ名稱が與へられると言はれて居る。「存在物を存在させること（Seinlassen）の嚴しい和かさの中に人間はその現存在の自覺を求める。」（Vom Wesen der Wahrheit 一九三〇年十二月の講演）と述べられて居るのである。この「存在物を存在させること」はいはば「存在」（Sein）である。現存在は自己を世界に投企することによつてではなく、「存在物を存在させること」を通じて自己の存在を開示されるに至るのである。

この「存在」は未だ現存在―存在物の「存在」の意味が強い。しかし既に存在物の「存在」ではない「存在一般」としての「存在」の意味が「眞理の本質についての講演」の中では考慮されて居り、「ヘルダーリンと詩の本質」では「存在の建立」（Stiftung des Seins）といふやうなことが語られて居るのである。「建立」はしかし乍ら「投企」の意味の「建立」ではない。「存在の自己開示」といふむしろ「被投」的な意味の強い術語なのである。

しかもその際、現存在は「存在と時間」に於ける「世界内存在」の「世界」にではなく「大地」（Erde）に屬して居る。「ヘルダーリンと詩の本質」では「……人間は何を證明しなければならないのか、大地に屬して居ることについてだ。」（Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung S. 34）といふ命題が語られて居るが、これは「存在と時間」等に於ける「世界内存在」としての、即ち了解性一般に於ける現存在の説明とは全く對照的な規定である。

「存在と時間」の中でハイデッガーは、古く言ひ傳へられて居る「關心の寓話」といふ話を引用して、人間が本來「ホモ」（大地）から作られたものであり、名前も大地の「ホモ」（homo）から與へられたといふ説明を行つて居る。（S. u. Z. S. 197.f）そこから直ちにこの「ヘルダーリンと詩の本質」に於ける「大地」に關する命題との關係を語ることは出來ないにしても、「大地」は既に「存在と時間」時代からハイデッガーの意識の中にあつた問題だといふことは出來るであらう。

「世界」に屬して居る限り、人間は實存的な努力や、判斷の中に居る。即ち「現存在の努力して得たもの」(Verdienst des Daseins)が得られる。しかし「大地」に屬することを證明する時には、現存在は「現存在の努力して得たもの」と全く反對の「存在の贈物」(Geschenk des Seins)の中に立つことになるのである。この「存在の贈物」の中に立つて居るといふことが後の「ヒューマニズムについて」等で言はれる「外存」(Ek-sistenz)である。

而して「ヘルダーリンと詩の本質」によれば、「現存在が詩人的にこの大地に住む」(Erläu. zu H. D. S. 31.39)といふことが「ヒューマニズムについて」に於ける「外存」と同義語に使用されて居るのである。

從つて「努力して得たものは滿ちて居る。だが(doch)人間は詩人的にこの大地に住む」(op. cit. S. 31.39)といふハイデッガーの言葉は「ヘルダーリンと詩の本質」までのハイデッガー哲學の總決算であり、その後の彼の思想過程に新しい問題を提供するものと言つてよいであらう。

「ヒューマニズムについて」の中では人間は「存在の番人(Hirt des Seins)」(Über den Humanismus S. 19)と語られて居る。而してその「存在」は人間が創造する(schaffen)ものではなく、「言語(Sprache)は存在の家(Haus des Seins)である。その住居の中に人が住む。思惟すること(Denkenden)と詩作すること(Dichtenden)はこの住居の番人である。」(op. cit. S. 5)のである。「しかし乍ら人間は他の能力と並んで言語をも所有して居るところの單なる生き物ではない。寧ろ言語は存在の家である。その中に人間が住み乍ら外存して(eksistiert)居る、といふのはけだし人間は言語を見張り乍ら存在の眞理に屬して居るから。」(op. cit. S. 21.f)である。「存在」を開示する言語の純粋な生起の中に人間が住むことがハイデッガーによれば、「詩作すること」(Dichtenden)であり、「思惟すること」(Denkenden)なのである。

而して「ヘルダーリンと詩の本質」と同年に執筆された「藝術作品の根源」の中では「世界と大地の間の葛藤(Streit)が葛藤されること(Bestreitung)」が「藝術作品の生起」(Holzwege S. 46)だと語られて居る。「世界」と「大地」の「葛藤」とは、それに屬してゐる了解性の分節としての「語ることに於ける言語」と、「詩的な言語」の「葛藤」だと言ひ換へることも出來るわけである。

ハイデッガーは單に詩的な言語に於いてのみ藝術性を認めて居るのではなく、了解性の分節としての「語ることに於ける言語」と「詩的な言語」の兩者の關係の中に於いて藝術性が成立することを認めて居るのである。

從つてハイデッガーに於いては思想の轉換の中間點に於いて、いはば了解性と詩の分極する中心に於いて「藝術性」の意味が成立して居ると言つてよいであらう。

一般に文藝として規定される際の言語が記號性を荷ひつつ詩的性格を示すといふこともハイデッガーに於いてはこの意味に解されることが出來るのである。

(一九五四・一二・一九)

參考の爲ハイデッガー(1889〜)の著作年表を次に掲げる

1. Neuere Forschungen zur Logik 1912. Literarische Rundschau 38, 1912, 465–472, 517–524, 565–570.

2. Kant und Aristoteles, (Besprechung von C. Sentroul) 1914. Literarische Rundschau 40, 1914, 330–332.
3. Die Lehre vom Urteil im Psychologismus 1914. (Freiburg 大學に於ける學位論文)
4. Der Zeitbegriff in der Geschichtswissenschaft 1916. Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik 161, 1916, 173–188. (1915年夏の私講師就講演)
5. Die Kategorien-und Bedeutungslehre der Duns Scotus 1916. Tübingen 第1版 (教授資格獲得の爲の論文)
6. Sein und Zeit 1927. 1. Hälfte. Halle 第1版 (Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung 8. 1927 からの拔刷)
7. Philosophie der symbolischen Formen, 2. Bd. Das mythische Denken. (Besprechung von E. Cassirer) DLZ 49, NF 5, 1928, 1000–1012.
8. Vom Wesen des Grundes 1929. Festschrift E. Husserl zum 70 Geburtstag, Halle 1929. 71—110.
9. Vorbemerkung zu E. Husserls Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins 1929. FEH 357–368.
10. Kant und das Problem der Metaphysik 1929. Bonn 第1版
11. Was ist Metaphysik? 1929. Bonn 第1版 (1929年7月24日に Freiburg 大學講堂で行はれた教授就任講演)
12. Vom Wesen der Wahrheit 1943 Frankfurt a. M. 第1版 (1930 年以來しばしば同名の標題の下に講演)
13. Von Wesen des Grundes 1931. 第2版
14. Die Selbstbehauptung der deutschen Universität 1933. Breslau 第1版
15. Was ist Metaphysik? (mit einem Nachwort) 1934. 第4版
16. Einführung in die Metaphysik 1953. Tübingen (1935年 Freiburg 大學での講義)
17. Der Ursprung des Kunstwerkes (1935年11月13日の Freiburg 大學の藝術學會での講演, 1936年1月 Zürich で大學學生總團體招集の時の講演, 1936年11月17日, 24日, 12月4日 Frankfurt a. M. の自由ドイツ本山僧會での講演 Nachwort は少しあとで書かれた, 後に Holzwege 1950に收錄)
18. Hölderlin und das Wesen der Dichtung 1936. München 1937. 第1版 (1936年4月2日にローマで講演され後に Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung 1944, 1950 に收錄)
19. Nietzsches Wort „Gott ist tot" (1936〜1940年の Freiburg 大學での5學期に講じられ1943年に脫稿, 後に Holzwege 1950に收錄)
20. Die Selbstbehauptung der deutschen Universität 1937. 第2版
21. Die Zeit des Weltbildes (1938年6月9日に "Die Begründung des neuzeitlichen Weltbildes durch die Metaphysik" といふ標題でなされた講演, 後に Holzwege 1950 に收錄)
22. Hölderlins Hymne: Wie wenn am Feiertage 1941. Halle第1版 (1939年と 1940年に講演, 後にErläuterungen zu Hölderlins Dichtung 1950 に收錄)
23. Platons Lehre von der Wahrheit 1942. Geistige Überlieferung 2.
24. Hegels Begriff der Erfahrung 1942〜43 (後に Holzwege 1950に收錄)
25. Hölderlins Gedicht: Andenken 1943. Hölderlin Gedenkschrift zu seinem 100 Todestag. Tübingen 1943, 267–324. (後に Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung 1950に收錄)
26. Hölderlins Elegie: Heimkunft/An die Verwandten 1944. Hölderlin Gedenkschrift zu seinem 100 Todestag 1943. Frankfurt a. M. 1944. 第1版 (1943年7月6日 Freiburg 大學にて講演)
27. Hölderlins Gedicht: Andenken 1944. 第2版
28. Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung 1944. Frankfurt a. M. (Hölderlin und das wesen der Dichtung, "Heimkunft/An die Verwandten",Andenken an den Dichter を含む)
29. Wozu Dichter? 1946. (1926年12月29日に死んだ R. M. Rilke の20回忌に行つた講演, 後に Holzwege 1950に收錄)
30. Der Spruch des Anaximander 1946. (後に Holzwege 1950 に收錄)
31. La remontée au fondament de la métaphysique 1947. Fontaine 11, 1947,

786—804.

32. Platons Lehre von der Wahrheit (mit einem Brief über den "Humanismus") 1947. Bern 第2版

33. Aus der Erfahrung des Denkens 1947.

34. Der Feldweg 1949. Frankfurt a. M.

35. Was ist Metaphysik? (mit Einleitung 7–21 und Nachwort) 1949.第5版

36. Vom Wesen der Wahrheit (mit Schlußanmerkung) 1949.第2版

37. Vom Wesen des Grndes (mit Vorwort S. 5.) 1949.第3版

38. Über den Humanismus 1949. Frankfurt a. M.

39. Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung 1950. Frankfurt a. M. ("Heimkunft/An die Verwandten", Hölderlin und das Wesen der Dichtung, "Wie wenn am Feiertage……", "Andenken", Anmerkungen. を含む)

40. Holzwege 1950. Frankfurt a. M. (Der Ursprung des Kunstwerkes, Die Zeit desWeltbildes, Hegels Begriff der Erfahrung, Nietzsches Wort „Gott ist tot," Wozu Dichter?, Der Spruch des Anaximander, Anmerkung を含む)

41. Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung 1951. 第2版

42. Zu einem Vers von Mörike 1951. Trivium 11. 1951,1–15.

43. Das Ding 1951. (Gestalt und Gedanke を含む) Bayrischen Akademie der Schönen Künste, München 1951, 128–148.

44. Seinsverlassenheit und Irrnis 1951. (Ernst Barlach, Dramatiker, Bildhauer, Zeichner, Darmstadt を含む)

45. Logos 1951. Festschrift für Hans Jantzen, Berlin, 1951. 7–18

46. Kant und das Problem der Metaphysik. (mit Vorwort S. 7–8) 1951. Frankfurt a. M. 第2版

47. Was heißt denken? 1952. Merkur 6. 1952, 601–611

48. Bauen, Wohnen, Denken, 1952. Darmstadt. 1952, 71–84. (Darmstädter Gespräche, Mensch und Bauen を含む)

49. Trakl 1953. Merkur 7. 1953, 226–258.

50. Einführung in die Metaphysik 1953. Tübingen. (1935年 Freiburg 大學での講義)

51. Was heißt Denken? 1954. Tübingen